

## 飛んで火に入る夏の虫

五小節目が近づいてきた。

いよいよフルートの出番である。最初のフレーズは、息継ぎなしで吹き続ける長丁場、大きく息を吸い込んで余裕をもたねばならない。出だしは、あくまで優しく柔らかい音がほしい。いわゆる音を長く伸ばすロングトーンで「ミ」の音をたっぷりと吹くのである。

わたしは舞台中央にフルートを構えて立ち、娘の真理が弾くピアノ前奏に全神経を集中していた。娘と一緒にフルートを演奏したはじめてのステージである。曲目は、グノーの『アベ・マリア』であった。この曲は、バッハの『平均率クラヴィーア曲集第一番』を伴奏に使い、それにグノーが流れるように印象的なメロディをつけた、多くの人がよく知っている有名な曲である。

白状してしまうと、この曲は聴いた感じよりあんがい簡単で、そのわりにうまそうに聞えるところがいいのである。とりあえず出だしは順調であった。出しやすい音のロングトーンほど気持ちのよいものはない。

スポットライトを使わない、いわゆる地明かりというふつうの照明だから、うす暗い場内でも演奏者から聴衆の顔はよく見える。前のほうに妻や知人が座っているのがわかった。そこから、どこを見てもなく視線をさまよわせていった。

と、その刹那、スーっと頭の中が空っぽになっていった。

そして、さっきまで頭の中に開いていたはずの譜面が、突如あと形もなく消え去ってしまった。頭が真っ白というか、透明になってしまったというか、「!?!」、つぎにどうすればよいかわからなくなってしまった。なすすべがないまま茫然とするフルーティストを残して、娘のピアノ伴奏は、静かに、しかし容赦なく進んでいった。

あとは支離滅裂、演奏にならない。やむをえず吹くのをやめ、娘にあやまって最初からやり直してもらうことにした。さあ、もう一度気を取り直し、あらためて挑戦である。この失態をなんとか挽回しなければならぬ。

しかし、なんとしたことであろう。この世に神などほんとうに存在するものであろうか。こんどは、娘の演奏が中断してしまった。娘の身長にくらべて椅子が高すぎたのだ。ちよつと寄

## セカンドテナーは苦勞人

楽器とその演奏者の性格には、ある種の共通性があると、まことしやかにいわれている。性格によって好む楽器にちがいがでるとでもいうのだろうか。

オーボエ奏者の茂木大輔氏の著書『オーケストラ楽器別人間学』に、そのあたりの人間模様がくわしく書かれていておもしろい。この本は言いたいことをズバズバと言つてのける、じつに痛快な読み物である。おそらく著者自身が愉快な人なのだろう。

ちなみに、「フルートの音は倍音が多く神秘的で柔らかい。……人あたりがよく、やや優柔不断……、初心者のうちには大きい音が鳴らず、ヘタクソでもそれなりの音がするばかりか、失敗してもオオゴトにならないところから、奏者は上達の過程において自我・プライドを傷つけられことなく育つ」そうだ。

ウーン、なかなか観察眼が鋭い。ぴったりではないが当たらずといえども遠からずである。

「むしろ冷静で客観性をともなった、学者肌の性格に奏者を導く。どことなくピントのぼけたような奏者が混じるのは、柔らかいアタックの作用であろう。楽器はおおむね金、銀などの

催者は確信しているからなのだ。

おとうさんコーラス大会は一九九〇年八月にスタートした。第一回目はサツポロビール川口工場の講堂で開催された。コール・グランツは、一回目からずっと連続して出ている。

日本で最初にはじめられたこの催しについて、たまたま雑誌に投稿する機会があった。ダイヤモンド社の『エンジョイ・グラフィティ』誌に載せた記事をかいつまんで紹介しよう。

タイトルは「ビールを飲みながら大合唱、全国初のおとうさんコーラス大会」である。

全国で初めてという「おとうさんコーラス大会」が埼玉県の某ビール工場で開催されました。場所がビール工場とくれば、目的は当然ビールにあることはいうまでも



## コンクールはお好き？

合唱にかぎらず音楽をやっている者であれば、誰しも一度はコンクールに出てみたいと思うものではなからうか。しかし、コンクールともなると、単なるコンサートとはわけがちがう。おいそれと出場できるものでないのは当たり前である。そのいっぽうで、コンクールは誰でもエントリーすれば参加することができる。誰にでもいちおう門戸は開かれている。そうはいってもエントリーしてくる合唱団は、それなりのレベルにあることがほとんどで、冷やかしは別として、ある意味で自然とセレクトされているといつていい。

創団以来、破竹の快進撃を続けていたコール・グランツは、ついに三年目の一九九一年に全日本合唱連盟主催の合唱コンクールに出してしまうことになった。もちろんいきなり全国大会に出られるわけではなく、まずは埼玉県の地区大会を突破しなければならぬ。

ついこのあいだまで、コンクールなど夢のような話だったのに、それが現実のものになってしまった。大部分の団員は自分たちの力を試してみたい欲求にかられていたが、コンクール出場に反対を唱える人もいないわけじゃなかった。反対派の中心はベテラン組で、知る人ほど



著者プロフィール **加藤 良一**

東京目黒に生まれる。子どもの頃から歌うことは好きだったが音楽の授業は嫌いで、いつも逃げまくっていた。芸術や文学に強い関心があったにもかかわらず、なぜか学校は理系へ進み、製薬会社へ就職。学生時代、ある大学のオケで首席フルートを吹いていた親友をみて、オレにもできないわけがないと、無謀にもフルートに挑戦してしまった。その後、娘のピアノ発表会に親子でゲスト出演したつもりが、とんでもない結果となり、それが縁で合唱の世界に足を踏み込む。現在、音楽以外にテニスなどにも首を突っ込んでいるため、休日はふだんより忙しい時間を送っている。

Email : rkato@max.hi-ho.ne.jp